

モードは語る

中野 香織

起源は「儉約を教える服」

外は蒸し暑い、屋内は冷房で肌寒い季節を乗り切りたい。体形の凸凹は隠したいが、厚着はしたくない。カジュアル過ぎるのは避けたいが、堅苦しいのもやばりたい。手持ちの服を生かしたいが、今年のトレンド感も少しほしい。

そんな矛盾に満ちた購買者の思いに応え、ここ数シーズンほどで人気を高めてきたアイテムがある。ジレである。

もともとは下着と上着の間に着るベストだが、今やフランス語でジレと呼ばれるようになり、ジェンダーフリーのファッションアイテムに進化した。形は腰丈からロング丈までバリエーション豊か。



イタリアのブランド「タリアトーレ」のジレ（参考商品）

素肌に直接着ても、袖なしコートのようにスーツの外側に着てもいい。

前ボタンを留めるとワンピースになり、開くとジレになるという変幻自在型もある。一着で数通りに使えるうえ、去年の服でも上からジレを羽織るだけで今風になるので、服を捨てずに済むというサステナビリティ感覚もついてくる。服飾業界も、まだワードローブになさそうな新しいアイテムとして売りやすい。

17世紀に西洋の服装システムにベストを持ち込んだのは、英国王チャールズ2世だった。ペストやロンドン大火といった同国を襲った厄災は、放埒（ほうらつ）

な宮廷への天罰だとの批判を受け、まず衣服から改革に着手する。「貴族に儉約を教える服」として導入したのが他ならぬベスト。見える前面にだけお金をかけ、見えない背部を安価な生地で作ることで生地代を節約せよという趣旨だった。

チャールズ2世の意図とは裏腹に、以後ベストは宝石や刺しゅうがあしらわれる最も装飾的なパーツに変貌する。20世紀には女性も着用するアイテムとして普及、21世紀に至って男性がスーツの上から着るアウターにまで化けた。

地球温暖化が進む時代の暖冬用コートとして購入する動きが出てくることも予想される。長袖ロングコートより使う生地が少ないので比較的安価になる。その意味で「儉約」につながる、とチャールズ2世が見たら言うだろうか。

「ジレ」に注目集まる